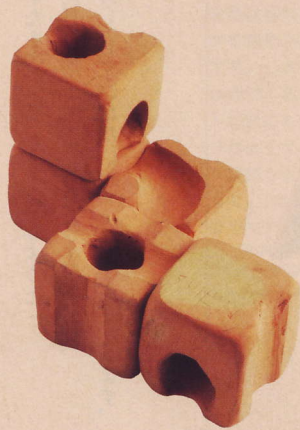


子どもに扱いやすいよう、サイズは5cm、日本製のビー玉を使用。どれだけ独創的に長くビー玉を走らせるかを競うコンペも開催。写真の「キュポロスタンダード」は27,300円。付録「gyutte!」でオーダーできます。

粘土でつくられた最初の試作品。キュポロは1979年、スイスのベルンで誕生。ソーシャルワーカーとして働いていたエッターさんが、心身に障がいをもつ子どもたちにパズルやゲームをつくっていたとき、原型となるあそびが生まれました。



ないと聞きましたが、大人が真剣に子どもとあそぶことで、そこに人間関係を学ぶやりとりや、こころの交流が生まれるんですね。それがとても大切なことだと思っております。

スイスにも、「子どもがひとりであるおもしろさのほうが好きでいい」という声があります。でも、そういうのはよくないな、といつも思います。ひとりあそびのできるおもちゃは、飽きるのも早いのではないのでしょうか。少々高価でも、長い期間、子どもと大人が一緒にあそべるものであれば、最終的にどちらが得か、わかりますよね。
おもちゃには世界を知るヒントが隠れています

子どもの好奇心の向く先は、年齢などによっても違います。キュポロも、すぐ夢中になる子もいれば、興味をもたない子もいます。大切なのは子どもの好奇心に合ったおもちゃを手渡すこと。そして、「もつとあそびたい!」という気持ちを引き出してあげることだと思えます。大人のほうでも、「こんなこともできるよ」と、あそび方のヒントをあげられるといいですね。

キュポロには、試行錯誤をくり返すなかで理論的な思考ができるようになる、夢中であそびながら三次元の感覚を養うといった要素もあります。そん



キュポロをつくっている、スイス・エメンタール地方にあるニーフェラー工場。キュポロには、近くで採れるブナ材のみを使用しています。

なふうに、子どもにとっておもちゃは、世界を知るきっかけになる、大人の世界への橋渡しになる道具だと思えます。わたしの感覚として、たとえば農家の子どもなら、身近にある農具に近いものであそぶのが自然な気がします。子どもは好きな大人の真似をしたくなるものですから。もちろん、そればかりではなく、一方には、ボールのように、どんな環境で育つ子どもたちも共通してよくあそぶおもちゃがあつて、キュポロもそういう種類のおもちゃだと考えています。おもちゃには何か大人の世界に結びつくヒントが隠れていて、子どもはあそびながら、それを感じているのだと思います。



エッターさん、 子どもにとつて 本物のおもちやつて 何でしよう？



Matthias Etter

スイスのおもちゃメーカー・キュボロ社代表。ふたりの子どもの父親であり、フォークロックバンド ONTARIO として音楽活動も行っている。左胸にはエメンタール地方のシンボル・エーデルワイスのドライフラワーが。

ビー玉が転がる道をつくる積み木「キュボロ」は、
ついつい大人も夢中になってしまうおもちゃ。
これを考え出したマティアス・エッターさんが
クレヨンハウスにあそびにきてくれました。
子どもとあそぶ大名人もあるエッターさんに、
おもちゃの「秘密」をおしえてもらいました。

お話し マティアス・エッターさん(キュボロ社代表)

撮影*泉山美代子(P.36)、宮津かなえ(P.37右上) 取材協力*ネアトリエニキティキ

長い目で見て選ぶなら
大人と一緒に
あそべるものを

おもちゃのことを、ドイツ語では「シュピール・ツォイク」といいます。シュピールは「あそび」、ツォイクは「もの」という意味です。ビー玉ひとつでも、その場をなごませ、たのしませ、見知らぬひとと友だちになるきっかけになるとすれば、それは「おもちゃ」であり、「あそび」だと思えます。

あそびには、社会性を育てる側面もあります。コンピュータ・ゲームをしてもよいのですが、それでは「交流」がないんですね。いま日本では、子どもとあそびたくても時間がない、あそび方がわからないという大人が少なく